

妊娠分娩産褥の母体生理に及ぼす影響について (II)

妊娠・出産の予後におよぼす施設差もしくは地域差についての検討

研究第1部 本 多 洋
千 賀 悠 子
可 児 和 美
太 田 克 行

<研究協力者>

東京大学医学部 宮 原 忍
東京都立荒川産院 天 野 和 彦

I はじめに

妊娠出産時の母子管理の面から、その対策をたてる基礎資料として従来いろいろの統計が発表されてきている。しかしながら、対象としてとった地域ならびに集団の特異性を視野に入れていないものが少なかった。今回われわれはこの点を考慮に入れ、都内におけるそれぞれ性格の異なった施設での昨年1年間における妊娠、出産時の統計をとり変動の実態を調べて2、3の知見を得たのでここに報告する。調査を行なった病院は、母子愛育会附属愛育病院、東京警察病院および東京都立荒川産院である。この中、東京警察病院は病院の性格に主として警察官ならびにその家族を診療対象としている。いわゆる職域病院としてみられるものであり、また母子愛育会附属愛育病院は、都心部に近い港区に位置し、経済的に比較的高い階層が対象に多い病院である。これに対し東京都立荒川産院は、都内周辺部の荒川区、足立区の境に位置しており、前に述べた2つの施設と比較して、やや低い階層が対象の中に多い。このことは、入院助産制度を利用して出産を行なうものが、47年度の調査では12.6%も占めることからもうかがわれ、また受診者が荒川区、足立区に居住する者で約80%を占めるといふ地域

性の強いこともまた特徴的である。これら、それぞれ特色の異なった3つの病院における昭和47年度に出産した産婦の東京警察病院665例、母子愛育会附属愛育病院859例、東京都立荒川産院1,729例、総数3,253例について、既往分娩の状態、年齢分布、出産時の異常、児の生下時の状態などのそれぞれについて調査を行なった。

II 調査結果

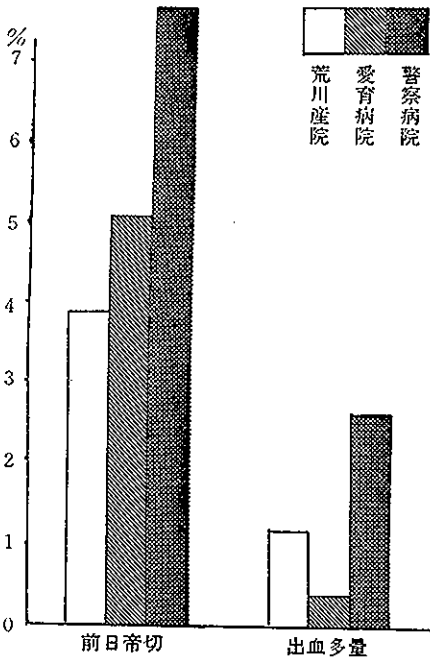
1) 既往分娩 (第1表)

既往分娩時の異常の中、帝王切開の既往、分娩時出血多量の2項目についてみると、荒川産院、愛育病院の頻度と比べて、警察病院のそれがやや高いことに気付く。これは病院の性格として職域病院であり、しかも中央に位置することより、前回他の施設にて異常分娩をした例が集まってきていることを推測させる。

第1表 (%)

	荒 川	愛 育	警 察
前 回 帝 切	3.9	5.1	7.7
出 血 多 量	1.2	0.4	2.7

第1図 既往分娩



2) 身体的特性 (第2表)

身体的特性については、これを身長についてみると、荒川産院受診者が、他の2つの施設と比べ、身長145cm以下の低い症例が5.2%と目立ち、生活環境との結びつきに興味もたれる。

第2表 (%)

	荒川	愛育	警察
身長145cm以下	5.2	1.2	1.4
身長165cm以上	0.9	2.4	2.1

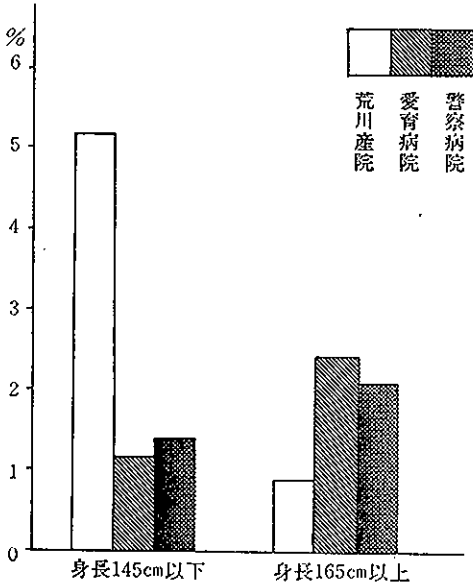
3) 年齢分布 (第3表)

全分娩者について、その年齢分布をみてみると、3つの施設を通じて20代が圧倒的にピークを示していることは共通した特色である。

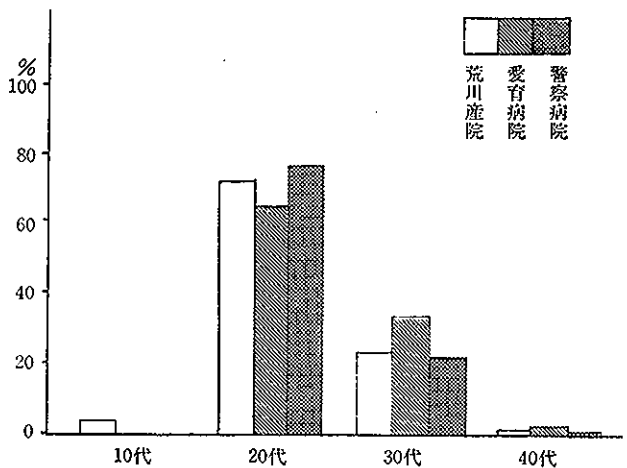
第3表 (%)

	荒川	愛育	警察
10 ~ 20	2.3	0	0
20 ~ 29	72.4	64.5	77.3
30 ~ 39	24.7	33.6	22.6
40 歳以上	0.6	0.9	0.2

第2図 身体的特性



第3図 年齢分布



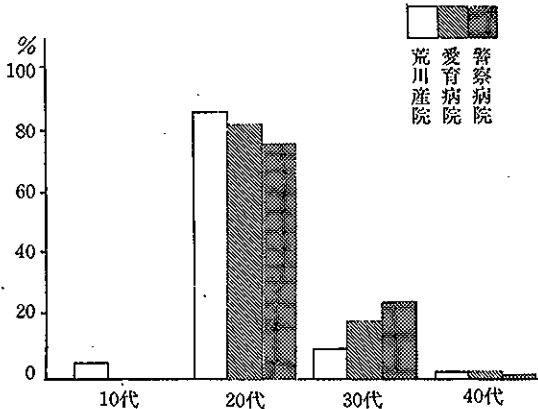
4) 初産婦年齢分布 (第4表)

初産婦の出産年齢について、その分布をみると、10歳代の分娩が荒川産院においてのみ3.9%も認められることは特徴的である。これは同様な傾向として20歳代の分娩が荒川産院86.1%、愛育病院81.9%、警察病院75.8%においてもみられるが、30歳代の分娩が逆に荒川産院、愛育病院、警察病院の順に高年齢へ移行しており、それぞれの病院の性格を反映しているものと思われる。

第4表 (%)

	荒川	愛育	警察
10 ~ 20	3.9	0	0
20 ~ 29	86.1	81.9	75.8
30 ~ 39	9.6	17.6	23.9
40 歳以上	0.5	0.5	0.3

第4図 初産婦年齢分布



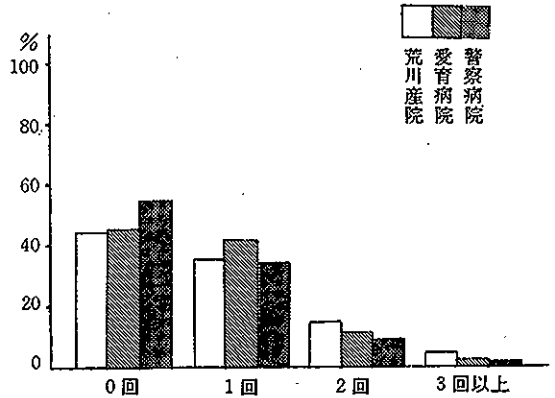
5) 経産回数 (第5表)

経産回数についてみると、3回以上の経産例が荒川産院にて5.0%と他の2つの施設と比べて多いことが特徴である。また、0回経産の頻度が警察病院で55.0%と荒川産院44.7%、愛育病院44.9%に比べて多いのは、出産年齢層が高い方へ集まっていることに対応している。

第5表 (%)

	荒川	愛育	警察
0 回	44.7	44.9	55.0
1 回	36.1	41.8	34.7
2 回	14.3	11.1	9.0
3 回以上	5.0	2.2	1.2

第5図 経産回数



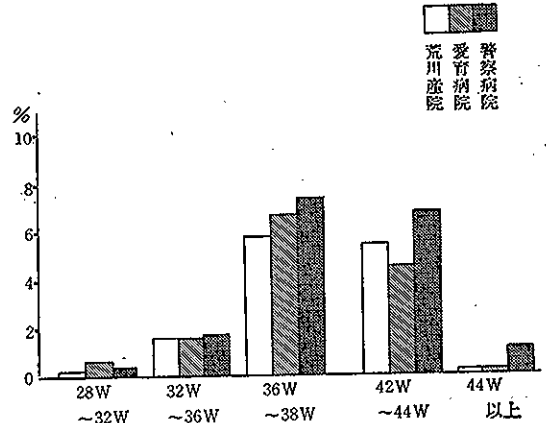
6) 分娩週数 (第6表)

分娩週数分布に関しては、妊娠38週以前の分娩は3施設共ほぼ同様の傾向を示してはいる。これに反して妊娠42週以降のいわゆる予定日超過に相当する頻度が、荒川産院5.6%、愛育病院4.6%に対し警察病院において8.0%と高くみられるのは、予定日超過に対する積極的か待期的かの管理の相違から生ずるものと思われる。

第6表 (%)

	荒川	愛育	警察
28W~32W	0.1	0.6	0.3
32W~36W	1.6	1.6	1.7
36W~38W	5.8	6.8	7.5
42W~44W	5.5	4.5	6.9
44W以上	0.1	0.1	1.1

第6図 分娩週数



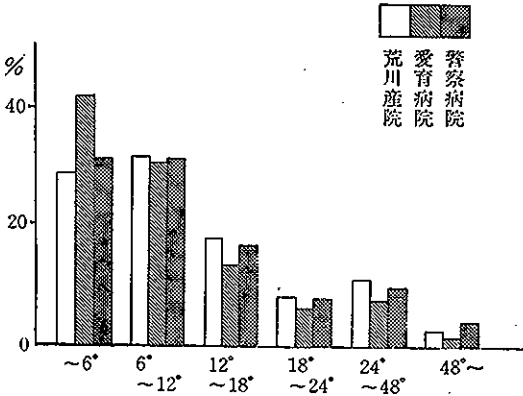
7) 分娩所要時間 (第7表)

分娩所要時間についてみると、荒川産院76.6%、愛育病院84.6%、警察病院78.1%と3施設共、約80%が陣痛発来後18時間内に分娩が終了している。

第7表 (%)

	荒川	愛育	警察
6° <	28.1	41.1	30.8
6° ~ 12°	31.1	30.3	30.8
12° ~ 18°	17.4	13.2	16.5
18° ~ 24°	7.9	5.7	7.7
24° ~ 48°	10.9	6.9	9.6
48° 以上	2.0	1.2	3.3
その他 (含帝切)	2.5	1.9	1.2

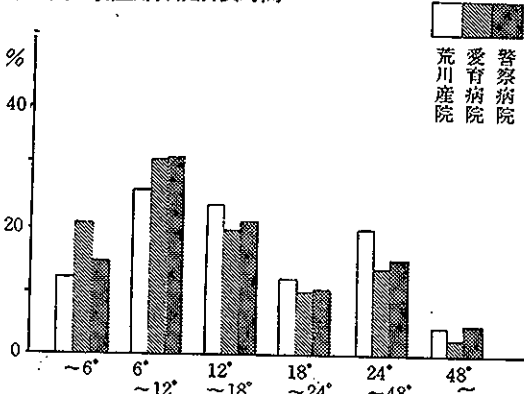
第7図 分娩所要時間



8) 初産婦分娩所要時間 (第8表)

初産婦に限って分娩所要時間を見ると、やや延長して陣痛発来後24時間内にその約80%が分娩を終了している。

第8図 初産婦分娩所要時間



第8表 (%)

	荒川	愛育	警察
6° <	12.2	21.2	15.1
6° ~ 12°	26.5	31.6	31.8
12° ~ 18°	24.3	19.9	21.6
18° ~ 24°	12.4	10.4	10.7
24° ~ 48°	20.3	13.7	15.1
48° 以上	4.3	2.3	5.0
その他	0	0.8	0.8

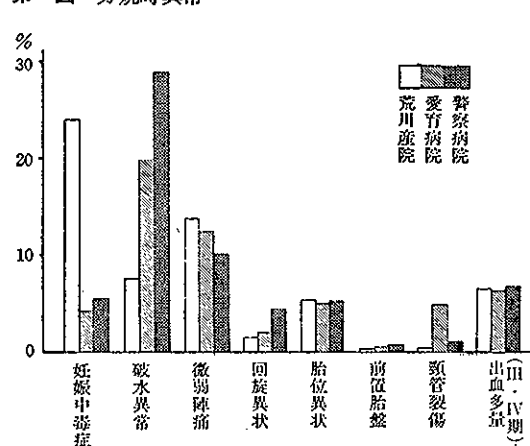
9) 分娩時異常 (第9表)

分娩時異常の項で特徴的なのは、荒川産院における妊娠中毒症例が23.9%と、愛育病院4.1%、警察病院5.6%に比べ圧倒的多数みられたことで、入院助産制度を利用する層の多いこの地区の特性を反映するものと思われるが、一方Ⅲ、Ⅳ期出血多量の症例が、他の2つの施設と同様の6%台の頻度にあるのは、弛緩出血をおこすほどの妊娠中毒症重症例が少数であることを示している。

第9表 (%)

	荒川	愛育	警察
中毒症	23.9	4.1	5.6
破水異常	7.7	19.8	28.9
微弱陣痛	13.6	12.5	10.1
回旋異常	1.5	2.0	4.5
胎位異常	5.3	5.0	5.3
前置胎盤	0.2	0.5	0.8
頸管裂傷	0.2	4.4	1.1
出血多量 Ⅲ期	5.3	4.3	2.4
Ⅳ期	1.2	2.0	4.2

第9図 分娩時異常



本多他：妊娠分娩産褥の母体生理に及ぼす影響について

破水異常、回旋異常の項においては、荒川産院、愛育病院、警察病院の順にその頻度が高いのは、一つにはそれぞれの施設における看護体制の問題が関係してくるものと思われ、このことは微弱陣痛、胎位異常などの項目における頻度が3施設共ほぼ同じことから推定される。

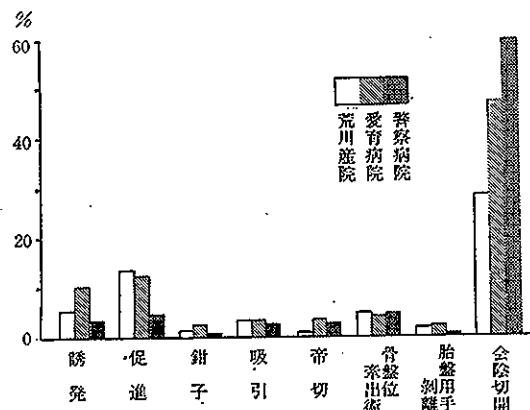
10) 分娩時処置 (第10表)

分娩時処置についてみると、誘発、促進を行なった症例が荒川産院、愛育病院に多く、これは分娩に対するとり扱いをめぐる施設の方針の相違が出たものと考えられ、同様の結果が鉗子、吸引逐娩術の頻度の相違として現れてきている。

第10表 (%)

	荒川	愛育	警察
誘発	5.1	10.5	3.3
促進	13.4	13.0	4.4
鉗子	1.6	2.6	0.8
吸引	3.6	3.6	2.9
帝王切	1.1	3.8	3.0
骨盤位牽出術	4.9	4.3	4.7
胎盤用手剝離	1.8	2.1	0.5
会陰切開	28.8	48.0	60.8

第10図 分娩時処置



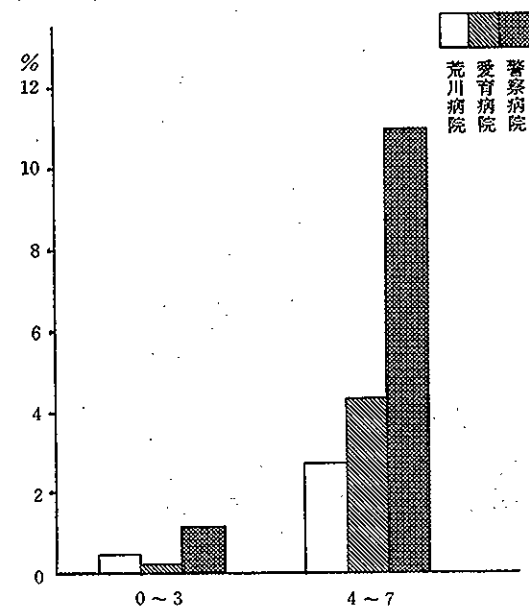
11) 児アプガールスコア (第11表)

出生時における児の状態としてアプガールスコアをとり比較してみると、荒川産院、愛育病院と比べて警察病院で、出生時アプガールスコア以下の仮死症例が12.2%とやや多いが、このことは同院の仮死症例82例中第2子以下の症例が1例のみと、圧倒的に初産例に異常が集中していること、初産婦平均年齢が警察病院例にて高いという前述の年齢分布からも推測しうるものである。

第11表 (%)

	荒川	愛育	警察
0 ~ 3	0.4	0.2	1.2
4 ~ 7	2.8	4.3	11.0
8 ~ 10	96.8	95.5	86.2

第11図 児アプガールスコア



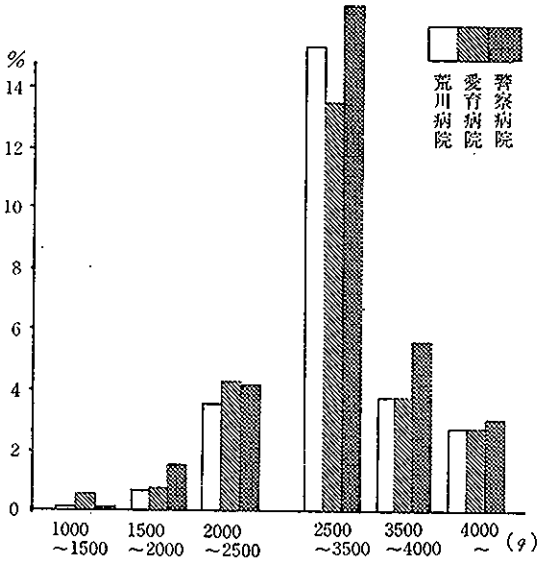
12) 児生下時体重 (第12表)

児生下時体重についてその分布をみると、生下時体重2,500g以下の低出生体重児の頻度が荒川産院4.3%、愛育病院5.5%に比べ警察病院5.8%と高く、これは生下時体重3,500g以上のいわゆる巨大児症例においても荒川産院22.1%、愛育病院20.2%に対し警察病院25.7%と同様に頻度が高い。このことは前述の児アプガールスコアにみるごとく、仮死症例が警察病院にて他の2施設と比べ頻度の高く出た1つの因子とも考えられるものである。

第12表 (%)

	荒川	愛育	警察
1,000~1,500g	0.1	0.5	0.1
1,500~2,000	0.6	0.7	1.5
2,000~2,500	3.6	4.3	4.2
2,500~3,500	74.1	73.1	67.2
3,500~3,800	15.5	13.6	16.9
3,800~4,000	3.8	3.8	5.7
4,000以上	2.8	2.8	3.1

第12図 児生下時体重



III 考察・結論

以上少くない項目についてはあるが、並列時点にて3つの施設間の違いをみると、従来の調査とは異なる

った観点にたった調査分析を試みてみたが、例えば身体的特性の項で荒川産院受診者の場合に、他の2施設と比べ身長の低い集団としてとらえられたこと。年齢分布において荒川産院、愛育病院、警察病院の順に出産年齢が高年齢へ移行し、これは初産婦年齢分布において、はっきりしていたことは特徴的であった。また、荒川産院、愛育病院において、分娩時処置として、誘発、促進術が積極的にとられており、分娩に対する施設の方針の相違が出ているが、これはそれを規制する一つの因子として医療従事者の年齢、充足率なども考慮の対象となるものである。

したがってこのことは、施設利用者の生活環境の相違、各施設の医療従事者の労働環境などの面から、施設の管理体制は画一的なものではなく、各施設に対応したものをとらねばならないことを考えさせるもので、さらに分析を進めてゆかねばならない問題である。

本論文の要旨は昭和48年第14回日本母性衛生学会学術集会において発表した。